
届けこの想い

masacchi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届けこの想い

【著者名】

N7258C

【作者名】

masachii

【あらすじ】

基本的に恋愛小説です。が、これから的发展は、作者である私にもよく分かりません（おいおい）

別れ（前書き）

初めまして。小説初心者です。
ければお読みください。

読みにくいと思いますが、よろしく

別れ

一弥は、幸せだった。

そつ。あの日、あの時、あの出来事がおひるまでは。

「今日も一日お疲れさま。」

一弥は、どぎきりの笑顔で、声をかけた。

相手は、正美。

「うん、一弥もね。」

一弥の胸は、幸福感ではちきれそうだった。

一弥は思い出す。

ちゅうじ、一年ほど前、

一弥は、正美のまえで、ぼろぼろ泣いた。

「ごめん。本当にごめん。僕が悪かったんだ。」

一弥は、必死で謝った。

そうする間も、涙は止まらなかつた。

まさみも泣いていた。まさみは、言った。「かずやが、今日、なん
で、私を誘ったのか、なんとなく感じてた。かずやのこおうとして
ること、気持ちを言葉では、理解したつもり。でも、内面的つい
うか、自分でもわからないんだけど。私のほうこそ、ごめん。」か
ずやは、じつと、聞いていた。

一弥は、涙を拭いて顔を上げると、

「そうだよね。正美のことだから、気づいてるんじゃないかと思つ
たよ。」

と、辛そうな、そして、少しだけ嬉しそうな、微妙な表情で、呟いた。

そのかずやの言葉を聞いたまさみは、真剣な眼差しで、かずやの顔
をじっと見つめ、視線をさまよわせていた。どこか気まずい空気を、

二人は感じていた。沈黙を破ったのは、まさみのほう。「大丈夫だから。」、まさみは、眼に光るものを見ながら、毅然として言った。

一弥は、正美の気迫に圧倒されて、ただうなづくことしかできなかつた。

ふたりは、互いに微妙な表情で、静かにその場を離れたのだった。

別れ（後書き）

いかがでしたでしょうか？もちろん、わるかつたとおもいます。すみません。でも、私の勉強のため、評価や、感想の送信を、よろしくお願ひします。「ご指摘、ご批判なども、どんどんいただきたいです。つきは、おそれく、月末になると思います。おたのしみにしてないわー」。

築き（繪書き）

遅くなりました。あと、なんかおかしいです。よければお進み
ください。

かずやは、一年前の、その一日の思い出に、今一度思いを馳せたのであった。

そして、今、自分の前の現実を思ったとき、かれの胸はなぜか詰まつたのである。

この一年の日々が、今、かれの脳裏を走馬燈のように駆け巡っている。

思えば長い一年間だつた。

（あの一年間は、僕にとつてなんだったんだろう？）

一弥の頭の中に回り続ける疑問。

今の二人の間は、沈黙が立ちこめている。

いつまで続くとも知れぬ沈黙が。（一弥つたら、また考えてるのね。あれだけ無駄だと言つたのに。）

正美の、心の中で、ふつとため息が漏れた。

二人は、それぞれの思いを胸に違う方向へと、ゆっくり歩きだした。この青年たちの未来は、はたして、どういう色になつていくのだろう。

ときには、傷つき、立ち止まりながら、それでも、自分なりの色を作つていくのではないだろうか。いや、

不器用に、見つけていくのかもしれない。しかし、たとえどんなことがあつたとしても、一人の心の奥底には、互いが存在し、生きていいく支えになるのではないか。

たとえ会えなかつたとしても、たとえ話せなかつたとしても、お互に心の中の相手をはげまし、元気づけ、

それによつて自分も元気になる。

そんなすばらしい関係を築いてゆけるのではないか。

今、二人は、小さな、しかし、大切な気づきをしたのである。

人を深く理解する、いや、互いに、互いを、より深く理解し合いつく

との大切さを。

二人にとって、後で、振り返れば、青春の甘酸っぱい思い出となるだろう。

現在進行形で、一人は、新たなスタートラインに立っているのだ。

そう、着実な1歩を踏み出そうとしている。

人は、こうして、成長していくのだろう。

築き（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。
投稿が遅れ、ほんとすみません。

次回はこいつにならやう。

10年後（1）

とある部屋の1室。

何事かをぶつぶつ咳きながらパソコンのキーを叩く成年。現在時刻は午前2時を過ぎている。

「ふーー。今日はこんなもんか。」

咳きながら彼は伸びをした。

(「これで、また課題に叱られるなくなりますわかな」と、その時。

一 消えそうに――咲きそうな――

(二九二)

心中で苦笑しながら、彼は携帯に出た。

「我就是你？」

なんだよ、富子？こんな時間にどうした？

「冷たいわねー。仮にも恋人からの電話なのに。」

おこめんこめん なんが最適か」とと疲れでてさ

疲れてるの?」「ちもー絶よー」それよ!れで聴いてよなんとか最近さ、変な男が私に着いてくんのよ。モー、気持ち悪いつたら

「ありやーしないわ。

卷之三

「、そいつ許せねーえとか、守つてやるとか言えないわけー？」

「柔道も初段だろー!?俺が守らなくて先大丈夫じやん。そ、言われてもなー! 富士で強いじやん。金氣道2段持てるし

「もう一つの問題じゃないでしょ？もう二つ。あなたには期待しない

わ、じや、ゆつべつ休んでね。」

「なんだよ。」

ふつりと切れた電話に、一弥と呼ばれたこの成年は悪態をついて、携帯を机に置いた。

彼と富子は大学時代の同級生だった。

ある日突然、富子に想いを告げられ、困惑した一弥だが、富子の強い気持ちに動かされてつきあい始めた。

「さて、寝るか。明日も朝早いしな。」

そう呟いて、彼はベッドに潜り込んだのだった。

10年後（1）（後書き）

すみません。更新をぼつました（汗） これから少しずつがんばっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7258c/>

届けこの想い

2010年10月28日07時13分発行